

# 親に心を向ける



私たちは、母親のおなかにいるときから、親と深くかかわりを持ちます。そして、生まれてから今日まで、最も大きな影響を受けるのも親という存在です。私たちは、親の温かい愛情に包まれながら、素直になったり、時には反抗したりしながら、成長していきます。「親の心子知らず」と言われるように、子どもにとって、親はあまりにも近い存在であるため、かえってその深い愛情になかなか気がつかないものです。

今月の『ニューモラル』は、親を思う心について考えます。

## 一人暮らしの母親

「もしもし、母さん？……。変わりない、大丈夫だね？」

「よじのり  
「良典かい。はいはい、大丈夫ですよ。でもね、お父さんがいないと、ほんと、寂しいねえ……」

「寂しいのは分かるけど、頑張つてよ。」

一人暮らしのほうがいいって言ったのは、

母さんなんだよ。今度、まとまった休みがとれたら、泊まりに行くから」

「そうかい。楽しみに待っているよ」

「じゃあ、切るよ。おやすみ」

「はいはい、電話ありがとね」



鈴木良典さん（48歳）は、都内の建設会社に勤めるサラリーマンです。

鈴木さんは、実家で一人暮らしをしている母親の敏子さん（76歳）に、ときどきこんな電話をしています。

実家は福島県のH市。良典さんは、このH市の町中にある小さな雑貨店の長男として生まれ育ちました。地元の高等学校を卒業すると、東京に出て大学に進学しました。そして、そのまま故郷に戻ることなく、現在勤めている会社に就職したのです。

その後、良典さんは結婚して、一男一女に恵まれました。両親も年齢のわりには比較的元気でしたので、細々ですが雑貨店を続けていました。ところが、昨年一月、父親の政夫さんが突然の病に倒

れ、他界<sup>たかい</sup>してしまつたのです。

良典さんは、一人残された母親の敏子さんを東京に呼んでいっしょに住もうと考えました。しかし、敏子さんは長年住

み慣れた家を離れたくないと強く希望し、一人で暮らすことになつたのでした。良典さんはいつも年老<sup>としお</sup>いた母親のことが気がかりでした。

## ≪親孝行をしようと思つたのに≫

良典さんは、三連休を利用して実家に帰りました。しかし、会社は休みでも、仕事は山ほどあります。実家でも仕事ができるようにと、ノートパソコン持参<sup>じさん</sup>で帰省しました。

「よく来たねえ、ほんとよく来たねえ」  
母親の敏子さんは、それこそ首を長くして、良典さんの帰りを待っていました。  
「母さん、何を言つてるの。この間、父



さんの一周忌いっしゅうきでみんなが集まったばかりじゃないの」

「そりやそうだけどさあ、ほんとよく来たねえ」

母親が、一人暮らして寂しい思いをしていることは痛いほど分かります。少しでも親孝行をしよう〃と、良典さんは思っていた。

\*

その日の夕食。食卓しょくたくには、たくさんの料理が並びました。それも良典さんの好物ぶつばかりです。食事の準備をする敏子さんは、まるで子どものように嬉しうれそうです。

亡くなるまで、父親の政夫さんが座っていた席に、良典さんが座りました。母親と二人だけの食事は寂しいものです。

母親が、毎日一人で食事をしているのかと思うと、胸むねが痛みます。

「もう食べないの？ もつとお食べよ」

敏子さんが声をかけました。いくら好物でも、若いころと違ってそんなに食べることはできません。

「おなかいっぱいだよ。もう十分、ご馳走ちそうさま」

と、良典さん。それでも敏子さんは勧めます。

「良典の好きなものを作ったんだからさあ、さあもつとお食べよ」

「分かっているって、もう……。明日も、明後日あさってもいるんだからさ、今夜は、これで十分だよ、ご馳走さま！」

良典さんは、少しつつけんどんな口調くちようになってしまいました。寂しひようじようそうな表情

を見せる敏子さん。食卓は、少し気まずい雰囲気になってしまいました。

「少し強く言い過ぎたかな……、まいったな」

## 思いとは裏腹に……

夕食の後片付けは、良典さんもしよに手伝いました。しかし、気まずい雰囲気がまだ尾を引いています。

「良典、このドラマを知ってるかい？  
すぐ面白いのよ。こっちに来ていっしょに見ようよ」

片付けが終わると、敏さんは居間に戻り、テレビのスイッチを入れました。

「いや、いいよ。ぼくは、ここで仕事をしながら見せてもらうから」

会社の仕事になる良典さんは、隣の部屋でノートパソコンを取り出し、仕事に取りかかりました。

しばらくすると、また敏さんが良典さんに声をかけました。

テレビの画面を見ている敏さんは、

「ねえ、テレビいっしょに見ないかい？  
このドラマ、つまらない？」

良典さんのことが気になるのか、チラチラ良典さんのほうを見ます。

「いや、ちゃんと見てるから。面白いよ……」

パソコンの画面に向かいながら気のな  
い返事の良典さん。



また、しばらくすると、敏子さんの声  
が……。

「ねえ、つまらないから見ていないの？」  
これでは仕事に集中できません。

「もう、うるさいなあ。見てるよ、ちゃ  
んと。母さんこそ、余計な心配しないで  
テレビに集中していたらどうなのさ」

思わず口をついて出てしまった言葉で  
した。敏子さんは、顔を曇らせてしま  
いました。

「しまった、またつっけんどんな言い方  
をしてしまった……。でも、ゆつくりド  
ラマなんか見ている時間もないなあ」  
少しは親孝行の真似事(まねごと)をと思つて帰省  
したはずでした。ところが、その思いと  
は裏腹(うらはら)に、母親に面(ま)に向かうと、どうも  
素直になれない良典さんでした。

# 敏子さんの祈り

そのうちに良典さんは、ノートパソコンの画面を見ながら、すっかり仕事に集中しはじめました。

気がつくと、テレビドラマも終わり、敏子さんは、寝室で床に入る準備をしているようです。

すると、仏壇の鈴が鳴り、誰かとしやべつているような敏子さんの小さな声が聞こえてきました。

「何だろう」と思った良典さんは、自然と耳を澄ませました。

「……お父さん、今日も一日ありがとうございました。……今日は、仕事が忙しいのに良典が来てくれましたよ。嬉し

かったわ。どう

か良典が体を壊

さないように

守ってあげてく

ださい。良典の

家族が幸せであ

るように……、

佳子さん、隆史

ちゃん、志帆

ちゃんが病気や

怪我のないように守ってください……。

お父さん、お願いしますよ。お休みなさ

い……」

チーン！







それは、仏壇の前で、敏子さんが亡き夫に向かって話しかける祈りの言葉でした。

良典さんは、実家に滞在している間、毎朝毎晩、この母親の祈る姿を見たのでした。

数日後。

\*

「もしもし、母さん？ 変わりない？」  
東京に戻った良典さんは、いつものように母親に電話をしました。

「大丈夫よ。この間は、忙しいところを来てくれてありがとうね。ほんと楽しかったよ。すごく嬉しかったよ」

敏子さんは、良典さんが来てくれたことが、よほど嬉しかったのでしよう。その後も、良典さんが電話をかけるたびに、同じことを何度も話題にするのでした。

良典さんは、帰省したときのことを思い返すと、母親に対して嫌いな思いをさせ

てしまったという後悔の思いがわいてきます。

「あの時、自分のために用意してくれた食事を、どうしてもつと喜んで食べる事ができなかつたのか。どうしてテレビドラマをいっしょに楽しんで観ることができなかつたのか。なぜ母親の気持ちを考えた思いやりのある行動がとれなかつたのか」と、思うのです。

そして、今まで母親を心配しているのは自分だと思っていました。それ以上に、母親が毎日仏壇に向かつて、自分たち家族の幸せを祈っていることも知りませんでした。きつと、亡くなった父親も、ずっと自分のことや孫たちの幸せを祈り続けていたのでしょうか。そう考えると、心の中に両親のほほ笑みが浮かんできま



「母さん……、今度またゆとり行くからね。体に気をつけるんだよ」

母親が一人暮らしを始めてから、親のことを考えることが多くなつた良典さんです。「これからは、もつと母さんの気持ちを考えよう。もつと優しくしてあげよう。話をよく聞いてあげよう」

そう心に誓いながら、良典さんは受話器を置きました。

# 親に心を向ける

親は、最も身近な存在です。また、親といえども何らかの欠点けってんをもった人間です。ですから、時に素直に心を開くことができないこともあるでしょう。



しかし、人生の困難こんなんに遭遇そうごうした際さい、両親の温かな笑顔が自然と思い出され、困難を乗り越える勇気を得たという人は、少なくありません。

私たちが、今日まで育ててくれた親の深い愛情に気づき、親の心につながって生きていくことは、「生きる力」を強くはぐくんでいくことになるのではないのでしょうか。

たとえ、親と離れて暮らしていても、また、親がすでに亡くなっていたとしても、自分がどのように生きていくことが、親に安心と喜びを与えることになるのか考えること、こうした常に「親に心を向ける心づかいと行為」が、私たちの精神を安定させ、人生をより豊かなものにしていきます。

# 母から学んだ亡き父の教え

京都産業大学教授の所功さん（65歳）

は、両親についての思いを、「母から学んだ亡き父の教え」と題して綴っています。

\*

所功さんは、生まれて間もなく父親が戦死したため、母親の手一つで育てられました。

所さんは、大東亜（太平洋）戦争が勃発した昭和十六年十二月に生まれました。父親の久雄さんが招集されて出征するのは、その半年後のことです。そして一年後、南太平洋のソロモン群島で戦死しました。

当然、所さんには父親の記憶は全くあ




りません。それでも所さんは、いつも父親の姿を身近に感じていたと言います。

それは、母親・かなさんの生き方、子育ての賜物たまものでしょう。

——辛いことも悲しいことも多くあったにちがいないが、私の記憶に残る母は、いつも明るく楽天的らくてんきであった。毎日毎晩「お父ちゃん、おはよう／お休み」と言い、外出のときも帰宅のときも必ず「お父ちゃん、行ってきます／ただいま」と言うのが、我が家の慣ない。神棚かみだなと仏壇のある奥の間には、姿の見えない亡き父が常つねにいてくれると想おもえば、母も私も寂さびしなかつたのである。(中略)

亡き父は母と私から離れたことがない。そのため、母が幼い私を叱しかり励はげます文句もんくは決けまっていた。「お父ちゃんみたいに死



『お父ちゃんは何時でも  
何処でも見守っているんやからな』

ぬ気でやれば、何でもできんことはない」  
「お父ちゃんは何時いっつでも何処どこでも功こうを見守まもっているんやからな」と。そう言われると、私は必死に頑張る気がわき、今でもベストを尽くせば父が助けてくれると素林そぼくに信じている——。

母親の言葉を心に刻み、所さんは、小学校、中学校と、人一倍勉強に励みました。成績も良く、向学心に燃える所さんでしたが、義務教育を終えたら、進学しないで働くことを当然のように考えていました。それは、家の経済状態と母親の苦勞を思つてのことでした。

しかし、担任の先生や周囲の大人たちは、熱心に進学を勧めました。所さんは、母親の励ましと亡き父親の存在に後押しされて高校進学を決意したのです。その後の大学進学の時も同じでした。

所さんが、常にベストを尽くし、人生を前向きに歩んで来られたのは、「母親を喜ばせたい。天国の父親にも喜んでもらいたい」という一念ではなかつたでしょうか。所さんは、親を思う心に計り知れ

ない力があることを感じたことでしょうか。常に亡き夫の面影を心に抱きながら、一人息子の自分を育ててくれた母親について、所さんは次のような感謝の言葉で結んでいます。

——思うに、人一倍苦勞を重ねてきたはずの母が、何でも好意的に受けとめて前向きに取り組み、いつも「お蔭さまで／＼有り難い」と口癖のように言うのは、おそらく父の影響であろう。その教えが、いつの間にか私のものとなり、また家内にも子どもにも伝わっている。まさしく「我が母に優る母なし」との想いは、歳

とともに深まるばかりである——。(モラロジー研究所刊

『れいろう』平成十四年八月号

「父母に学ぶ」参照)



# 親との精神的な絆を問い直す



昔から「孝は百行の本なり」と言われています。これは、自分の生命を生み育ててくれた親・祖先に対する孝養こそ、あらゆる道徳実行の基本であることを教えたものです。

親が存在しなかったら、私たちはこの世に生を享けることはなかったでしょう。そして、父母の先には、祖父母が、さらにまた曾祖父母が存在しています。そこには、遠い過去から一筋につながる「いのちのつながり」があります。

親に心を向け、孝養を尽くしていくこ

とは、連綿として受け継がれてきた「いのち」を見つめ直すことになります。と同時に、これからのいのちをつないでいく自分の子どもや孫とのつながりを考えることでもあるのです。

昨今の親子関係や家庭問題から起こる悲しい事件や出来事が多発する現代だからこそ、私たちは自分の親との精神的な絆を今一度しっかりと問い直し、もし仮に問題があれば、お互いに思いやりの心を十分に発揮して話し合い、改善していくことが大切ではないでしょうか。

